

# 俳句甲子園メール

2017年秋分号

No.023

NPO法人 俳句甲子園実行委員会 (E-mail:info@haikukoushien.com)  
〒790-0814 愛媛県松山市味酒町1丁目10-2  
TEL:089-943-1512(平日13:00~17:00) FAX:089-948-4819  
松山市役所 文化・ことば課 (E-mail:bunkakotoba@city.matsuyama.ehime.jp)  
〒790-8571 愛媛県松山市二番町四丁目7番地2  
TEL:089-948-6952(平日8:30~17:15) FAX:089-934-1287

子規・漱石生誕150年、第20回の節目の大会は、開成高等学校の2年連続10回目の優勝で幕を閉じました。来年の第21回大会に向けて、俳句甲子園は進化を続けていきたいと思ひます。

## 俳句甲子園が苦手だけれど心から感謝をしている

北海道旭川東高校OB 柳元 佑太

今回は、旭川東高校OBで公式作品集編集委員の柳元佑太さんに、俳句甲子園を通じて「俳句」に向き合うことへの思いについて、文章を寄せていただきました。

俳句を本格的に始めたのはいつ?と問われたとき、ぼくは「二年生の秋から」と答えている。初めて出場した俳句甲子園が終わった後にあたる。それほど、俳句甲子園以後、俳句が急に面白いものになった。佳句を作れば承認欲求が満たされるというのが分かって味をしめたのというものもある。しかし、俳句そのものがこれまでとは異なり、光を帯びて見えるようになってきた。これが一番大きい。そして、俳句が面白くなればなるほど、俳句甲子園というものを改めて考えることが多くなった。

ぼくは、自分の句を語ることが嫌だった。俳句という詩形の特徴を考えれば考えるほど、語ることは句の魅力を減じることになる。他ならない気がしていたし、「青春真っ只中の高校生」という物語を背負ってテキストが読まれてしまうことも嫌だった。純粋な詩を目指すには、枷となるものが俳句甲子園には多すぎた。

だからその時期のぼくにとつて、ただただ俳句を書くことが、逆説的に、俳句甲子園から遠ざかることの担保になっていた。

俳句と俳句甲子園の間の溝。ほんの数センチの浅い浅い溝かもしれない。けれどもぼく

にとつて、その溝は大きな隔たりだった。迂闊に飛び越えてしまうと、大事なものを失ってしまうような溝だった。

だからぼくは、俳句と俳句甲子園のどちらにも足を乗せているように見えて、俳句甲子園側の足は乗せているふりをした。だからだろう、三年生の時の俳句甲子園はころっと負けた。悔しくはなかった。

斜に構えていただけなのかもしれない。でもそれが、その時に出来る精一杯の俳句への向き合い方であり、俳句甲子園への向き合い方だった。

三年の秋、ぼくは大学で文学を学ぼうと決心した。北海道に残るつもりだったけれど、どうしても刺激的な環境で俳句がやりたくなり、東京の大学への推薦枠を使った。

それほどまでにぼくを駆り立てたのは、紛れもなく、俳句そのものだ。けれど、俳句甲子園が無かったら、多くの俳句は成り立たなかった。俳句というものについて考察することも、悩むこともなかった。そもそも俳句にすら出会わなかった。ぼくは俳句甲子園が苦手だけれど、心から感謝をしている。俳句甲子園は、良い場所だ。

ああ、気づけばまた夏がやってきた。けれど、ぼくが俳句甲子園と聞いて思いつくのは、炎天下の松山ではない。思い出すのは、安っぽく秋風鈴が響く部室で、俳句との向き合い方に悩んでいた、あの頃の自分だ。

## 第20回大会優勝は開成高等学校(東京)

■全国大会結果

優勝：開成高等学校

(東京都、2年連続10回目)

準優勝：愛知県立幸田高等学校

子規・漱石生誕一五〇年記念賞

(決勝リーグ進出チーム)

愛媛県立松山西中等教育学校

岩手県立水沢高等学校

福島県立会津高等学校

宮崎県立宮崎西高等学校

■最優秀賞(文部科学大臣賞)

旅いつも雲に抜かれて大花野

開成高等学校 岩田 奎